まずは自ら考え、最善の策を選び、チャレンジを！

有限会社明月堂　藤縄直美さん

飯綱町牟礼にある和洋菓子の「明月堂」。大正15（1926）年に和菓子職人の初代が創業、続く二代目は当時まだ珍しかった生クリームケーキを販売するなど新風を吹き込んだ。そして現代表を務めるのは、二代目の三女に生まれ、菓子づくりの道を選んだ藤縄直美さんだ。彼女の当主としての日々について明かしていただいた。

■ 父の病気で急きょ世代交代を迫られ…

県外で菓子づくりを学び、故郷に戻ると同時に職人として店に入りました。すでに姉二人は家を出ていたため、「私が継ぐのだろうな」程度に考えていました。しかし、父が病に倒れ、母とともに現場から退くと状況は一変。当時小学校低学年の子育て真っ最中ということもあり、責任の重さと仕事量の多さに体力も限界でした。

■ 大きな危機が経営改革のきっかけに

実は世代交代を迫られると同時期に、父がメインの保証人だった親戚筋の会社が経営難に陥り、共倒れの危機に直面していたのです。牟礼の商店街が活気を失って行く様子も目の当たりにしていましたから、内心「このまま店を続けられるだろうか、続けてもいいのだろうか？」と、とても不安でした。でも、その会社の後継者が倒産を避ける道を選んでくれたうえ、保証人問題は娘である私もまた逃れられないものと理解したため、しばし悩んだ後は「やるしかない！」と、覚悟を決めました。資金面でも大変でしたが、完全な家族経営に経理専門のスタッフや菓子職人を入れ、組織づくりから商品開発や製造の現場まで改革に着手するきっかけになりました。

■ “社長”も人を頼り、経験や智恵を借りよう

これまで常に、友人、ご近所さん、スタッフ、お客様に支えられて来ました。急に店を切り盛りすることになった時は、お母さん友達やご近所さんが子どもたちの面倒を見てくださいましたし、職人や経理人を紹介してくれたのも友人です。スタッフは、職人タイプで経営が苦手な私のことを理解し、可能な範囲で得意なことを担ってくれます。さらに商品開発においては、試作段階でなじみのお客様に忌憚ないご意見をいただいています。社長という立場になると、なかなか人に頼れない方もいるでしょう。でも私は、社長とは言え得意不得意もあればある知識が足りない場面もあるため、積極的に経験や智恵を分けていただきつつ成長を目指すことにしています。

■ 全力を尽くすからこそ、手を差し伸べてもらえる

友人からもらった「必死に頑張っていたら必ず助けてくれる人がいる」という言葉を、ずっと心に留めてきました。誰しも助けを乞う前にまず全力を尽くすべきです。私の場合は、自らじっくり考え、最善の策を選び、最低一度はチャレンジしてみる。それでもダメなら周囲に相談する。これを基本姿勢として今後も歩み続けます。

夢は、故郷の代名詞となって広く愛される銘菓を生み出すこと。スタッフに対しては、個性を尊重して能力を発揮してもらえるよう心掛けているのだとか。印象的だったのは、「いざ話してみると、同じような苦しい経験をした人って意外といるものよ」と話す自然体な笑顔だ。

藤縄直美（ふじなわ・なおみ）
有限会社明月堂　代表取締役社長

趣味は新しいモノやコトと出会うこと。休日は子どもに会うのを口実に（？）東京に出掛け、刺激や情報を得て浮かんだアイデアを新商品開発に生かす。